

二 次の文章は佐々木邦作『変人伝』の一部である。よく読み、後の各問いに答えなさい。

「勉強しないと、東京の叔父おじさんのところへやってしまいますよ」

僕が中学生の頃、母はそう言つて驚かすのが常だった。叔父は母の弟だ。父は女学校の先生だけれど、叔父は高等学校の先生だから尚おえらいことになつていた。しかし父に言わせると、叔父は変わりものだった。

「叔父さんは学者でしょうね？」

と僕は母に聞いて見た。

「今に博士になりますよ」

「もうなつても良い時分じゃありませんか？ 僕が小学生の頃からです」

「お上の都合つてものがありますわ」

「それよりも大学の先生と喧嘩をしているから、なかなかないでしょう。学問が出来ても変人じゃ駄目ですつて」

「誰がそんなことを言ったの？」

「学校の修身で習いました」

「嘘をつけてことをね？」

と母は①にらんだ。

叔父の変人問題から両親の間に意見の衝突が時折起つた。

「もうそろそろ貰いそうなものだね。一つわしから勧めて見ようか？」

と父が言つた。博士のことだと思つたら、お嫁さんのことだった。

「駄目でしょう」

「何故？ 変人だからかい？」

「変人なんてことありませんわ。頭のなかで学問で一杯ですから、常識が圧倒されているんですわ」

「とにかく、もうそろそろ四十だよ」

「博士になつてからでしょう」

「その問題は別として、早く貰わせる法はないだろうか？　グズグズしていると、大野家の跡が絶えてしまう」

「それは私も考えていますわ。今までも度々勧めたんですけれど」

「今度は俺が出馬する。ちょうど良いのがあるんだ」

「女学校の先生？」

「うむ」

「安井さんじゃありませんか？」

「そうだ。この間世間話をしながらそれとなく訊いて見たら、永久に独身でいるつもりでもないらしい。三十を越しているから、お嫁さんとしては若い方じゃないが、お婿さんだつてもういい加減、臺*1が立っている。何だか縁がありそうに思えて仕方がない」

「あなたからなら効き目があるかも知れませんわ。よろしくお頼み致しますよ」

と母は納得した。

父は国漢の先生だから、文章が得意だ。長文をしたためて送った。僕は出しに行つて、用心のために切手を三枚貼った覚えがある。しかし返事が来なかった。こちらは早手*2回しに写真が貰つてあつたから、それを添えて、もう一ぺん勧めた。今度は折り返して、叔父から写真が着いた。

「とうとう落成したぜ」

と言つて、父が開けて見たら、こちらから送った写真だつた。しかもインキでひげが書き入れてあつた。父は怒つてしまった。

「おれはもう幸太郎さんとは付き合わない」

僕が某高等学校へ入ると間もなく、父はその所在地の女学校へ栄転した。父としては良いめぐり合わせだと思つていたが、実は天然自然にそうなつたのではなかった。母が叔父に頼んだのだつた。叔父の友人がその県の学務部長をしていたから、うまく計らつてもらつたのだつた。その夏、叔父が採集旅行の途中を立ち寄つた時、父はしきりにお礼を言つた。叔父は植物学が専門だ。誰も知らなかつた苔こけを発見して、オーノコータリヤと学名をつけている。これで大野幸太郎が世界的に残るつもりだ。

「道彦はせっかく高等学校へ入つたのに、なぜ学問をやらない？」

と叔父はたしなめるような調子で聞いた。

「はあ？」

「同じことなら、学問をやったら良いだろう」

「文科です。国文学をやるんですから学問でしょう」

「文学は学問じゃない。学問らしい系統をつけた常識だ」

「常識じゃないです。一種の学問です」

「一種というなら勸弁かんべんして置く。文学は人間のこしらえた学問だ。そんなものよりも自然のこしらえた学問をやってもらいたかった」

「植物学ですか？」

「うむ。お前が植物学をやってくれば、叔父さんの後継ぎにするんだけど」

「しかし今さら仕方ありません」

「一年遊んで、理科へ受け直したらどうだ？」

「興味がないんです」

「馬鹿につける薬はない」

「おやおや」

と僕はもう返す言葉もなかった。

「国文学だって、学問でないことはないだろう」

と父が口を出した。国漢の先生だから、侮辱されたように感じて黙っていられたのであったのである。もとより譲歩する叔父でない。二人の間に議論が始まった。父もかなり一こくの方だから始末が悪い。母が間に入って、ようやく双方の機嫌を直した。

「幸太郎さん、植物学よりも国文学よりも、もっと大事なことがありますよ」

と母が言った。母は姉だから、多少権威を持っている。

「何ですか？」

「結婚問題です」

「ははあ」

「早くもらわなければ駄目ですよ。いつまでもウカウカしていたんじゃ大野家つてものが絶えてしまいますわ」

「僕はオーノコータリヤで満足します」

「どういふこと？ それは」

「大野家が続いても、ロクデナシが出ればかえって物笑いになります。それよりもオーノコトヤつてものがあります。植物は決して悪いことをしません。のみならず、絶える心配のない奴ですからありがたいです。大野家の芳名ほうめいを世界的に永遠に伝えてくれます」

と叔父はどこまでも植物学だった。

母も諦めた。しかし大野家から出たのだから責任を感じている。

「それじゃ雅男に植物学をやらせて、後を継がせたらどう？」

と持ち出した。雅男は中学四年生だった。

「結構ですね。雅男、やるか？」

「いやですよ、僕は。僕は国家のために尽くすんです」

と雅男ははねつけた。

「馬鹿野郎！」

と叔父は大喝だいかつした。叔父は植物学こそ国家のためだと思っている。

②僕は、叔父が来るたびに気が荒あくなっているように感じた。一種の病気だろうと思った。その翌年だったか、翌々年だったか、叔父は女子高等師範学校へ転任した。新聞で辞令を見て、父がお祝いの手紙を出したら、すぐにその返事が来た。葉書だった。

「拝復、今回は榮転えいにこれなく、むしろ左遷させんに候。同僚の国文学と議論の末、腕力うでぢからに及び候ためなり。喧嘩けんかはこれにて三度目ゆえ、学校長に気の毒と存じ、逃げ出し申し候。御一笑ごいちやうくだされたく。早々頓首とんすう」

恐らく国文学は学問でないという主張だったろうと僕は察した。常例に反してすぐに返事を寄こしたのは、あの議論のためには職をも賭するという示威せいめいだったかも知れない。

「やっぱり叔父さんは変人ですね」

「変人さ」

「変人なんてことはありませんよ。あれは I のですわ」

と母は弟の正気を疑うわらない。

ちょうどその頃、叔父の親友の島崎画伯しまざきが市の素封家そほうかの肖像しょうざうを描えきに来て、立ち寄とってくれた。父とは郷里きよで家が近ちかかったから、年

は違うけれど、子供の時から友達だ。

「幸太郎君は転任しましたね」

と父が話の中に叔父の問題に触れた。

「はあ。けんかをしたんですよ」

「よくやるね。困った男だ」

「実は僕もこの間やったんです。しかしどうせここへ寄るんですから何か伝言ことうけがあるかも知れないと思って、立つ前に顔を出したら、『何しに来た？』と言いました」

「ははあ」

「こちらも意地です。門のところへ小便しに来たんだと言って、出て来てやりました」

「ハッハ、ハ、」

「僕はもう数十回です」

と島崎さんは良い相棒らしい。

「君と菊池君、それに竹内君ですね、あの変人に愛想を尽かさないのは」

「そこは昔なじみです。お互いに性根が分っています」

「何でけんかをしたんですか？」

「碁碁です。碁敵碁敵は憎にくさも憎にくし懐なつかしししということわざがありますが、幸太郎君のは憎にくさも憎にくし憎にくらししですから敵あいません」

「ハッハ、ハ、」

「僕が勝ったら、僕の絵をけなしはじめたんです。学問がないから、描く草花がみんな死んでいると言うんです。そうそう、君のその石は死んでいるぞと言ったら、そう言い出したんです。普段悪口を考えて置いて、盤面の形勢次第で持ち出すんですから癩しやくにさわります」

「そんな手回しの良い人間ならむしろ結構ですが、あれは植物学ばかりが学問だと思っっているんですよ。世間知らずです。きっとその議論だったでしょう？ 学校の方の喧嘩も」

「経緯いきざつを聞きましたよ。同僚が何か珍しい花を持って来て、学名を聞いたんです。幸太郎君はすぐに分らなかつたものだから、『学問のない奴は物の聞き方が間違っている』と答えました。挑戦的だからいけません」

「愛嬌あいきょうがないからね。同じことを言っても角が立つ」

と父も十分経験がある。

「相手はムツとしたんでしょ。『それならどういふ風に訊けば宜いんだ?』『植物の鑑識を求める場合には花と実を揃えて持つて来るものだ』なるほど』『分かったら出直して来い』しかしこれは幸太郎君が無理でしょう。花と実が同時にある筈はありません』
「なるほど」

「相手もそこに気がついたから、『そんな非常識なことを言っても駄目だ』とやり返しました。殆んど同時に、ピシヤリと横つ面を幸太郎君の手の平が見舞いました。教官室ですから、皆寄つて群むらつて大騒ぎです」

「見て来たようですね」

「そこは画家の想像力です。幸太郎君は他の同僚とも度々やって来たから具合が悪くなって、いさぎよく辞表を出したんです」
「ちょうど良く転任の口があつたんですね」

「いや、〇〇先生が間に入つて、半年ばかり待つてもらつたんです。先生のおかげですよ」

「〇〇先生に愛想を尽かさればはしまいかと思つて、僕はそれを始終案じています」

「〇〇先生も実は少し呆れているんですよ。昆侖草こんろんそうの話を御存じですか?」
「いや」

「学生時代に先生につれられて天城山あまぎやまへ採集さいしゅうに行つたんです。先生は指導をしながら、平賀源内のことを話したそうです。源内は博識だから知らないものがなかつた。あつても当意即妙Aにすぐ名をつけてしまふと先生が言った後、幸太郎君は一つの草を見つけて、先生に名を聞きました。先生は昆侖草と答えました。『先生、源内流じやないですか?』と幸太郎君がやつたんです。例の調子でしょう。冗談とは聞えません。先生はすっかり御機嫌を悪くしてしまつたそうです」

と島崎さんはなかなか詳しい。主題が変わりものだから話に花が咲く。

「結婚はしないと云つていますが、君達の見たところではどうですか?」

「十年ばかり前までは皆で勧めたんですけど、もう諦めました」

「無論 B でしょね?」

「その点は偉いものですよ。竹内も菊池も頭が上りません」

「堅いのは結構ですけど、困ったものですよ。しかるべき相手を差し向けて交際させて見るような方法はどうか？」

「とてもとても。僕とは正反対です」

「何が？」

「女ほど汚いものはないと言っています。僕はまた女ほど綺麗なものはないと思っっているんですから」

「君は特別だ。極端と極端だろう」

「ハッハ、」

「大野家は結局絶えてしまいませんか」

「いや、オーノコータリヤで永久に残ると言っただけです」

「ああいうのが学問中毒というものでしょう。是非もない」

と父はいよいよ「C」を投げたようだった。

【語注】

- * 1 臺が立つ……適する時期が過ぎる。年ごろを過ぎる。
- * 2 早手回し……事の起こらぬ先に準備・手配をしておくこと。
- * 3 頓首……手紙の終わりに書いて相手に敬意を示す語。
- * 4 素封家……財産家。民間のお金持ち。
- * 5 碁敵は憎さも憎し懐し……喧嘩別れした敵も三日会わないと懐かしくなるということ。

問一、本文に出てくる四字熟語に関する後の問いにそれぞれ答えなさい。

i、——線部A「当意即妙」と似た意味を持つ四字熟語を次から一つ選び、その記号を塗りつぶしなさい。

① 臨機応変

② 一触即発

③ 猪突猛進

④ 電光石火

ii、[B]には、「心や行いが正しく立派な様」という意味を持つ「ひんこうほうせい」という四字熟語が入る。この四字熟語を漢字で書きなさい。

問二、[C]について、「どんな手を打っても成功の見込みが立たず、あきらめること」という意味の慣用句になるような[C]に入る語句をひらがな二字で答えなさい。

問三、——線部①「母はにらんだ」とあるが、なぜ「母」は「にらんだ」のか。適当なものを次から一つ選び、その記号を塗りつぶしなさい。

① 「僕」が、博士になれるはずのない叔父さんが博士になれるという嘘をついたため。

② 学者である叔父がけんかつ早い乱暴者だと学校で教えていることに腹を立てたため。

③ 変人は博士になれないという持論を学校で教わったものと嘘をついたため。

④ 学校の先生が自身の弟である叔父を変人だとけなしたことに腹を立てたため。

問四、——線部②「僕は、叔父が来るたびに気が荒くなっているように感じた」とあるが、それはなぜか。その理由として適当なものを次から一つ選び、その記号を塗りつぶしなさい。

- ① 叔父が「僕」を植物学の後継者とするべく、会う度に強要してくるため。
- ② 叔父が植物学こそ至高の学問だと何度も語ることに嫌気がさしてきたため。
- ③ 叔父が意義をもって国文学を選出した「僕」を否定するような発言を繰り返すため。
- ④ 「オーノコータリヤ」が「僕」よりも存在価値として勝っていると言う叔父を軽蔑したため。

問五、——線部③とあるが、なぜ叔父は大野家が「オーノコータリヤで永久に残る」と言い張っているのか。その理由として、適当でないものを次から一つ選び、その記号を塗りつぶしなさい。

- ① 人間は良い方向に成長するかどうか分からない一方、植物は不変の価値を持っているため。
- ② オーノコータリヤは幸太郎の名を世界に知らしめた植物であり、自分の名もこの先歴史に刻まれると確信したため。
- ③ オーノコータリヤは自身の名に由来して名付けた植物であり、いわば自分の分身体と考えているため。
- ④ 人間の名が永久に残ることはありえないが、オーノコータリヤという植物の名は永遠に残ると考えているため。
- ⑤ 女性は汚いものであるが、オーノコータリヤという植物の持つ美しさは人々を魅了し続けると信じているため。

問六、Iに入る台詞としてふさわしいものを本文中から三〇字以内で探し、初めと終わりの五字ずつを抜き出して答えなさい。